

過で肝傷害は改善した。血液透析(以下HD)は要さなかったものの腎障害は遷延し、慢性腎不全保存期としての管理を行っている。肝生検による病理組織像は非特異的肝炎であり、肝実質内の壊死巣はごく軽度であった。当科における1982年の経験例にも肝生検が施行されており同様の所見である。後者では高度の腎障害を認めたためHDを計11回施行し離脱している。

7 当院における肝嚢胞治療の経験

藤原 真一・横田 隆司・目時 亮
大嶋 智子・小林 由夏・飯利 孝雄
七條 公利

立川総合病院消化器内科

肝嚢胞の多くは臨床上治療の対象とはならないが、症状を有するものや圧排による肝機能異常の見られるものなどは治療の対象となる。今回、我々は治療を必要とする3例の巨大肝嚢胞を経験したので報告する。

症例1は66歳女性。右側腹部痛を主訴に来院し腹部CTにて肝右葉に巨大嚢胞を認めた。この嚢胞に対し、エコー下肝嚢胞穿刺術施行。穿刺時排液のPHは7.6, CA19-9は24000であったが、ミノサイクリン合計2400mg注入し、チューブ抜去前にはPH7.1, CA19-9は479まで減少していた。症例2は79歳男性。腹部CTにて肝全域に多発性嚢胞認め、同様に嚢胞穿刺術施行。ミノサイクリン合計2400mg注入し、PHは著変ないものの、CA19-9は穿刺時24000以上あったものが220まで減少していた。症例3は68歳男性。多発性肝嚢胞と診断されるも、ドレナージチューブ留置には経肝的ルートが困難と考え、手術となった。ミノサイクリン注入療法の効果判定には、治療終了後3から12ヶ月必要と言われている。われわれが経験した内科的治療施行の症例はともに、6から18ヶ月の経過において嚢胞の縮小傾向を認めた。ミノサイクリン注入療法は効果ある治療法と考えられるが、ドレナージチューブ留置困難と考える場合には、外科的治療に踏みきる必要性があると考えられた。

8 経頸静脈的肝生検の適応と臨床的意義

石川 達・野村 邦浩・馬場 靖幸
林 俊彦・太田 宏信・吉田 俊明
石原 法子*・上村 朝輝

済生会新潟第二病院消化器科
同 病理検査科*

肝生検は一般に慢性肝炎の診断を中心におこなわれているが、腹水貯留症例や高度の出血傾向を示す症例では経皮的肝生検は禁忌とされている。経頸静脈的肝生検(Transjuglar Liver Biopsy: 以下TJLB)は高度肝障害症例でも安全に肝組織の摂取が可能である。TJLBを施行した10例を対象にTJLBの意義と問題点を検討した。適応としたのは劇症肝炎2例、血液凝固能異常を認める原因不明の肝障害4例、原因不明の肝腫大症例1例、原因不明の肝障害を認めた腹水症例2例、DIC症例1例である。全例からTJLBにより肝組織は採取可能で組織学的診断は可能であった。1検体採取に対する平均穿刺回数は1.8回で、平均施行時間は37.4分であった。合併症は肝内静脈瘤、疼痛、一過性不整脈で重篤な合併症は認められなかった。TJLBは手技上、煩雑で第一選択とはならないが、肝生検が必要な症例でも凝固能異常や腹水症例も多く、TJLBの適応例は多く潜在するものと考えられる。

9 当院における経橈骨動脈腹部血管造影検査の検討

高瀬 郁夫・村田 陽稔・渡辺 卓也
川端 英博

新潟労災病院内科

消化器疾患においては腹部血管造影検査は診断および治療上重要であるが、従来からの大腿動脈よりのアプローチは、検査後の安静臥床時間が長く、患者の負担が大きくなるが多かった。近年、カテーテル、シースなどの改良により、経上腕動脈、経橈骨動脈よりのカテーテル検査が行われるようになり、検査後の安静臥床時間が短縮され、負担を減少させることができるようになった。当施設では上記の理由から平成13年8月より経

橈骨動脈血管造影検査を開始している。実際に当施設で行っている方法について若干の文献的考察を加えて報告する。

10 肝内病変の評価について PET が有効であった 1 例

小林 由夏・飯利 孝雄・大嶋 智子
横田 隆司・七條 公利

立川総合病院消化器内科

症例は 70 才，男性。胃角小弯に 2 型胃癌を認め，腹部 CT 上，肝門部門脈内に欠損像が見られた。長時間の安静仰臥位が困難で，他の検査による病変の血栓か腫瘍塞栓かの評価は不可能であった。病変の鑑別の目的に F-18 標識フルオロデオキシグルコース (FDG) を投与して体内の糖代謝を画像化するポジトロンエミッショントモグラフィ (PET) を行ったところ，同部位に高集積を認め，腫瘍塞栓であることが判明した。悪性腫瘍では正常組織に比較して糖代謝が亢進していることが知られており，FDG-PET は，肝臓および局所の病変の良，悪性の鑑別，手術前の病変の staging，腫瘍マーカーの上昇があるときの Screening について有用と考えられる。肝転移病変の評価においては，造影 CT に比して sensitivity, accuracy とともに高いという報告もある。今後臨床の場で，PET が機能的画像として活用されると思われる。

11 塩酸チクロピジンによる肝障害 — 薬剤師の視点から —

継田 雅美・畑 耕治郎*・五十嵐健太郎*
古川 浩一*・堺 勝之**・小田 弘隆**
新潟市民病院薬剤部
同 消化器科*
同 循環器科**

当院で最近経験した塩酸チクロピジンによる薬物性肝障害の 3 例を報告した。抗血小板剤である塩酸チクロピジンは一専門診療科が処方する特殊薬剤ではなく多数の診療科が処方する普及薬剤で

あり，過去再三の緊急安全性情報が出されているにもかかわらず重大な副作用が頻発している。副作用の発現部位 (造血器・肝臓) と時期 (約 2 ヶ月) がほぼ特定されているため，処方前に血算・肝機能をチェックし処方後 2 ヶ月は最低 2 週に 1 度の血液検査を行なうのは周知のごとくであるが，この検査体制でも副作用の早期発見には不十分な例がみられた。塩酸チクロピジンの副作用による肝障害は一旦発症すると重症・遷延化する例があるため，異常値が出現した場合グレード 1 であっても中止を検討する必要がある。塩酸チクロピジン投与に際しては厳密な処方適応および投与期間の可及的短縮化を考慮すべきであるとともに病診連携が推進される状況下から，紹介先へも塩酸チクロピジンにおける情報とコメントを提供すべきである。

12 B 型肝炎に対する lamivudine 治療 — QOL 改善例を中心に —

畑 耕治郎・渡辺 和彦・阿部 行宏
相場 恒男・五十嵐健太郎・古川 浩一
何 汝朝・月岡 恵

新潟市民病院消化器科

Lamivudine 治療を 1 年以上継続した B 型肝炎変 7 例 (うち 1 例は非代償性) について臨床経過を検討した。検査値を治療前と 12 か月後で比較すると，ALT, アルブミン, 血小板数, AFP では有意差は認めなかったが，コリンエステラーゼ値は有意に上昇した。HBV-DNA (TMA 法) は 5 例が検出感度以下となり，1 例が低下し，1 例が YIDD 変異により再上昇した。HBe 抗原/抗体のセロコンバージョンは 1 例 (18 か月後) に認められた。

肝機能の flare up は治療終了例 5 例中 2 例 (1 例は YIDD) と継続例 2 例中 1 例 (YIDD) に認められたが，重症化には至らなかった。また 1 例において，肝外合併症である慢性腎炎によるネフローゼ症候群が改善し浮腫が消失した。非代償性の 1 例において，肝性脳症・胸水・腹水が改善し，PS の改善，栄養状態の改善，通院回数の減少など